

日本人はこう作られた

明治の琉球処分から戦後の沖縄復帰まで、近代日本百年の沖縄、アイヌ、台湾、朝鮮に対する政策論を検証し、ナショナルアイデンティティーの問題を考察した『へ日本人』の境界』（新曜社）を出版した。「植民地」政策をめぐる各時代の状況と膨大な言説を社会的な手際で見事に整理し、境界領域の同化をめぐる力学と心理メカニズムなどを鮮やかに浮かび上がらせる八百ページ近い大冊だ。

「歴史学の先行研究に助けられてもいますが、たくさん調べたなあとは思う。調べれば調べるほど、自分が考えることぐらいい、昔の人も考えていたんだなあ、と気付かされる。その結果、もっと調べる。当時の人もこんなにいると考えていたのに、どうしてあんな歴史になってしまったのか、と」

例えば、アジア主義者の中野正剛の朝鮮論に、今日の多元主義的な思考が既にはさまれていたことを指摘し、その限界を跡づける。

戦前唯一の「朝鮮人」衆院議員の屈折、柳

小熊 英二さん(35) 慶応大学専任講師



東京都世田谷区で

植民めぐる力学と心理

宗悦のオリエンタリズム的側面への沖縄側の反発、戦後の革新ナショナリズムや沖縄復帰運動の問題性など、様々なテーマを巡った末、結論部分では、近代日本は欧米に対し被害者意識を抱きながらアジアを侵略した「有色の帝国」だったと提起。加害・被害の二分法的思考がもたらすナショナリズムの悪循環から脱却する道を、「有色」と「帝国」の両義性を率直に認める中に探ろうとする。

「でも結論の章はさほどの内容とは思わない。それより、へ日本人」がいかに作り出されていくのかを描いた各章を読んで、考えてもらいたい。何より引用された当時の人々の言葉と出あってほしい。その中に、これからどういふ社会をつくっていったらよいかを考えるヒントがたくさん詰まっています」

表紙は台湾先住民族の衣装を着た少女が、学校らしい建物の前で日の丸を掲げている写真。「当然だと思われるへ日本人」像が崩れていく感覚を出したかった。悲惨な歴史をあえて可能性につなげる試みとして」（彰）